

SHORT REPORT

## 扁平上皮腺上皮混合型乳頭腫の1例

高橋 光<sup>1</sup>・中岡浩二郎<sup>1</sup>・菊池慎二<sup>1</sup>・  
飯嶋達生<sup>2</sup>・清嶋護之<sup>1</sup>・横瀬智之<sup>3</sup>

### A Case of Mixed Squamous and Glandular Papilloma

Hikaru Takahashi<sup>1</sup>; Kojiro Nakaoka<sup>1</sup>; Shinji Kikuchi<sup>1</sup>; Tatsuo Iijima<sup>2</sup>; Moriyuki Kiyoshima<sup>1</sup>; Tomoyuki Yokose<sup>3</sup>

<sup>1</sup>Department of Thoracic Surgery, <sup>2</sup>Department of Pathology, Ibaraki Prefectural Hospital, Japan; <sup>3</sup>Department of Pathology, Kanagawa Prefectural Cancer Center, Japan (Adviser of Pathological Findings).

(JLCC. 2023;63:217-218)

**KEY WORDS** — Mixed squamous and glandular papilloma, Lung cancer, Metastatic lung tumor

Corresponding author: Hikaru Takahashi.

**要旨** — 肺乳頭腫は稀な良性腫瘍であり、原発性肺癌や転移性肺腫瘍との鑑別が問題となる。今回、子宮体癌術後6年目のCTで指摘され増大傾向を示した扁平上皮腺上皮混合型乳頭腫の1切除例を経験したため文献の考察

を加え報告する。

**索引用語** — 扁平上皮腺上皮混合型乳頭腫、原発性肺癌、転移性肺腫瘍

はじめに：肺乳頭腫は稀な良性腫瘍である。術前、術中診断は困難なことが多く悪性腫瘍との鑑別が特に重要となる。今回我々は悪性腫瘍との鑑別が困難だった症例を経験したため報告する。

症例：70歳、女性。

既往歴：高血圧症、糖尿病。

喫煙歴：なし。

現病歴：2016年5月に子宮体癌Ⅱ期に対して子宮全摘出術、両側付属器摘出術、骨盤内リンパ節郭清を施行後にドキシソルピシン＋シスプラチンによる術後補助化学療法を6コース行っている。2021年5月の胸部CTで左肺S<sup>8</sup>に結節影を認めた。1年の経過で増大したため転移性肺腫瘍が疑われ当院紹介となった。

入院時検査所見：血液検査は異常所見なく腫瘍マーカーも正常範囲内だった。

胸部造影CT：左肺S<sup>8</sup>にB<sup>8</sup>b内腔を閉塞する内部が不均一に造影され、辺縁明瞭な1.9cmの分葉状結節を認める。1年前は同部位に0.7cmの結節影を認めていた(Figure 1A, 1B)。

FDG-PET：左肺S<sup>8</sup>の結節影にSUV-max 13.8(1時間値)のFDG高集積を認める(Figure 2)。

治療経過：転移性肺腫瘍もしくは原発性肺癌が疑われ胸腔鏡下左肺下葉切除および縦隔リンパ節郭清(2a-1群)を行った。

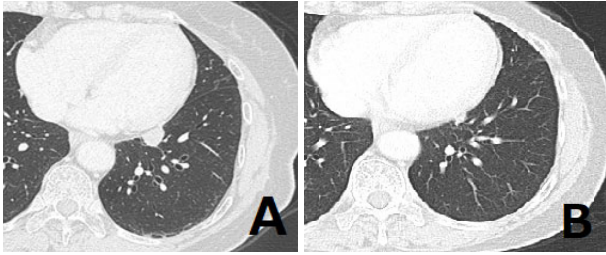
病理所見：左肺下葉S<sup>8</sup>の胸膜直下に気管支内腔を充填している境界明瞭な乳白色の腫瘍が認められた(Figure 3A)。組織学的には気管支内腔を充填する腺上皮および扁平上皮への分化を示す乳頭状腫瘍が認められた。腺上皮成分と扁平上皮成分の比は1:2であり扁平上皮腺上皮混合型乳頭腫と診断した。P16免疫染色では扁平上皮成分で疎らな陽性細胞を認めた(Figure 3B~3D)。既往の子宮体癌組織像は一部重層扁平上皮への分化を伴う類内膜腺癌であり今回切除された肺組織の所見とは異なるものだった。

術後経過：術後6か月時点で再発所見は認めていない。

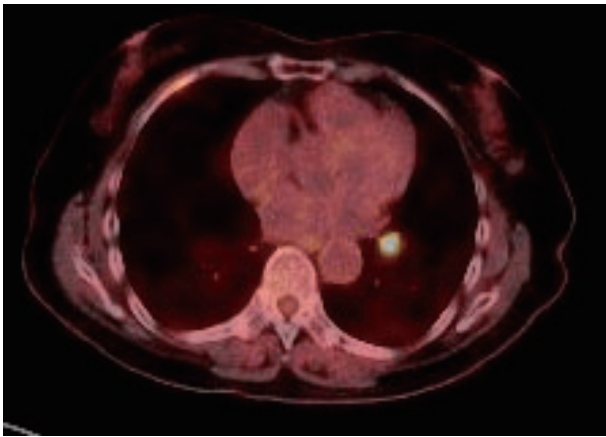
考察：肺乳頭腫は稀な腫瘍であり扁平上皮型、腺上皮型、扁平上皮腺上皮混合型(以下、混合型)に分類される。<sup>1</sup>悪性腫瘍との鑑別が重要だが、CT上特徴的な所見はなく、FDG-PETで高集積を示す例も多いため術前診断は困難とされている。<sup>2</sup>本症例のFDG-PETにおけるSUV-maxは13.8と高集積であり、画像単独で悪性腫瘍

茨城県立中央病院<sup>1</sup>呼吸器外科、<sup>2</sup>病理診断科；<sup>3</sup>神奈川県立がんセンター病理診断科(病理アドバイザー)。  
論文責任者：高橋 光。

※第194回日本肺癌学会関東支部会推薦症例(令和4年12月17日 日本肺癌学会関東支部会)。



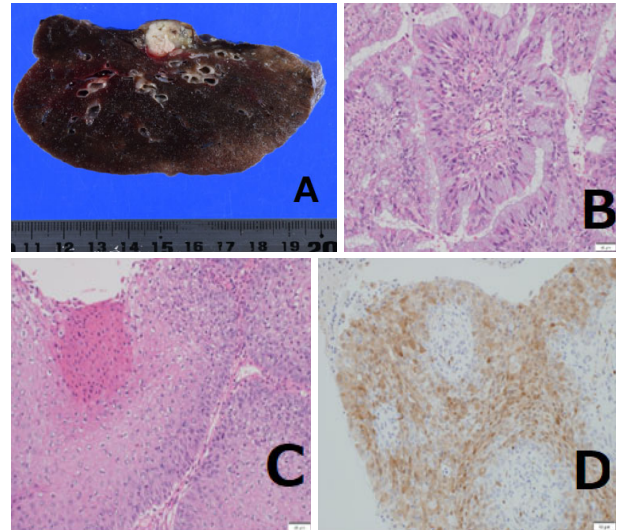
**Figure 1.** **A.** CT shows a 1.9-cm marginal, well-defined lobulated nodule with heterogeneous contrast in the left lung S<sup>8</sup> that obstructs the B<sup>8</sup>b lumen. **B.** A CT scan 1 year earlier showed a 0.7-cm nodule at the same site.



**Figure 2.** PET-CT shows the hyperaccumulation of FDG with a maximum standardized uptake value of 13.8 (1-hour value) in a nodule in S<sup>8</sup> of the left lung.

と鑑別することは困難と考えられた。病理所見は気管支内を乳頭状に発育する腫瘤として観察され、腺上皮成分が全体の3分の1以上を占めるときに混合型乳頭腫と診断される。扁平上皮型と混合型では悪性化することがあり、混合型乳頭腫の25%に悪性化が見られたとする報告がある。<sup>1</sup> また、扁平上皮型はヒトパピローマウイルス (HPV) 感染との関連があり、P16免疫染色で鑑別可能である。混合型でも扁平上皮型と同様に癌化傾向があるが、HPVとの関連は認められていない。このため、混合型に関してはHPVとは異なる発生メカニズムが存在していると考えられるが機序は明らかにはなっておらず今後も症例の蓄積が必要である。

治療に関しては乳頭腫と術前診断がついていれば部分切除で十分と考えられており、これまでの報告でも術後再発は見られていない。しかし、術中迅速病理で膀胱癌肺転移と診断された混合型乳頭腫の症例や混合型乳頭腫内に多形癌が見られた報告もあり、<sup>2,3</sup> 多くは原発性肺癌に対する術式を取らざるを得ないと考えている。



**Figure 3.** **A.** A well-defined borderline mass filling the milky white bronchial lumen was found just below the pleura in the S<sup>8</sup> lower lobe of the left lung. **B, C, D.** Histologically, there was papillary growth of the tumor filling the bronchial lumen, with differentiation into glandular epithelium and squamous epithelium. Nuclear atypia was mild, and there was little to no fission pattern. The glandular component showed columnar cells containing mucus (**B**). The squamous component showed stratified growth from the stroma with some keratinized components (**C**). The ratio of glandular to squamous epithelial components was 1:2, and a diagnosis of mixed squamous and glandular papilloma was made. Immunostaining showed sparse cells in the squamous component positive for P16 (**D**).

結語：今回、扁平上皮腺上皮混合型肺乳頭腫の1切除例を経験した。FDG集積を伴う症例も多く術前の正確な診断は困難であり、治療も原発性肺癌に準じたものにせざるを得ないことが多いと考えられる。

本論文内容に関連する著者の利益相反：なし

## REFERENCES

1. Yun JS, Kim DW, Choi YD, Na KJ, Song SY. Mixed squamous cell and glandular papilloma of the lung in a 64-year-old woman. *Korean J Thorac Cardiovasc Surg.* 2014; 47:55-58.
2. 吉川真生, 平見有, 三好健太郎, 安藤陽夫. 肺末梢の嚢胞内に認めた孤立性扁平上皮性乳頭腫の1例. *日呼外会誌.* 2020;34:149-153.
3. Lagana SM, Hanna RF, Borczuk AC. Pleomorphic (spindle and squamous cell) carcinoma arising in a peripheral mixed squamous and glandular papilloma in a 70-year-old man. *Arch Pathol Lab Med.* 2011;135:1353-1356.